

ホガースのデザイン論

正会員 藤田 治彦

美の分析

諷刺的な説話画、風俗画によって知られるホガース (William Hogarth, 1697-1764) は、鋭い社会観察を基礎とした一種のリアリズムによって近代イギリス絵画に新たな展開をもたらす一方、著作権に関する法案の成立に関与するなど、作品制作を越えて、近代のデザインの諸問題に積極的に取り組んだ人物である。1735年 6月25日に施行されたいわゆる「ホガース(著作権) 法」は、自作版画の海賊版の横行に業を煮やしたホガースの申し立てにより成立を見たもので、デザイナー(下絵師) とエングレイヴァー(彫版師) に14年間の作品の独占権を認める内容のものであった。¹ ホガースの絵画あるいは版画作品の制作を越えた活動として、デザイン論研究の観点から、この「著作権法」以上に注目されるのが、1753年の著書『美の分析 (The Analysis of Beauty) 』である。近代美学の揺籃期18世紀のイギリスには、既にハチスンの『美と徳の観念の根源の探究』(1725年) があり、道徳感覚 "moral sense" などハチスンに継承され発展させられる諸概念を示したシャフツペリも断片的ながら、美学的論文、芸術論をのこしている。² 一方、パークリーによる幾つかの著作には古典的で固定的な美の観念を覆す思考が織り込まれており、心理分析的な記述を基本的な方法とするイギリス経験論は、ホガースの『美の分析』の数年後には、その感覚主義を更に徹底させたパークの『崇高と美の観念の起源の探究』に至ることになる。

ホガースの『美の分析』は、これらの思想家による著述の多くと比べ、概念規定が曖昧で、方法論にも欠けるところがあるが、イギリスの芸術家による初めての本格的な美についての考察であり、また真に「造形芸術論」と呼べるイギリスで最初の出版物としての価値を有するものでもある。事実、それはホガース自信が強く意識す

るところで、シャフツペリ、ハチスンなどの実名こそ挙げぬものの、美の根源の究明を目標として掲げながら、結局は何も解明することなく、美を徳に従属させ、時には両者を同一視する道徳美 "moral beauty" の世界に入り込んでしまう、実際の制作を知らぬ思想家たちによる近年の美についての論評に対する反発を『美の分析』執筆の動機のひとつとして、その序文に記している。³

当時の芸術論もホガースにとっては不満足なものであった。当時の芸術に関する考察は、過去の芸術家の賛美に終始し、その芸術の基礎ではなく、結果あるいは効果ばかりを論じていると、ホガースは批判している。⁴

このような芸術論、そして、上記のような状態に陥っている美に関する考察に対し、『美の分析』は形態の美醜を定める原理が何であるかを示そうとする。それをホガースは「考えうる限りのすべての多様な諸形態の諸観念を精神に生じせしめる、それらの形状 "lines" とそれらの種々の組み合わせの本性を、今まで以上に精密に考察することにより示す。⁵」本論は、その『美の分析』のデザイン論的観点からの分析を試みる。

美の原理

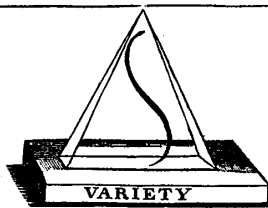
それではホガースは美をどのように分析し、どのような結論に至るのであろうか。18世紀のイギリスの美に関わる考察には "je ne sais quoi" (なんとも言いようが無いもの) という表現が散見される。⁶ 「説明できぬもの」とは時には道徳美をも含んだ意味での美 "beauty" であり、あるいはその高次の概念である優美 "grace" であった。美は分析的に理解されるものではない。この美の在り方を更に強調するために美と優美とを区別した言い方をすれば、「美は法則によって喜ばせ、優美は法則なしで喜びを与える」のである。⁷ ホガース自身、美と優美とを使い分け、高次の美を理想とするが、

THE
ANALYSIS
OF
BEAUTY.

Written with a view of fixing the fluctuating IDEAS of
TASTE.

BY WILLIAM HOGARTH.

*So vary'd be, and of his tortuous train
Curl'd many a swanlike wreath, in fight of Eve,
To lure her eye.----- Milton.*



LONDON:

Printed by J. REEVES for the AUTHOR,
And Sold by him at his Houfe in LEICESTER-FIELDS.

MDCCLIII.

図-1 ホガース『美の分析』表題紙

それを"je ne sais quoi"で済ませることには満足しなかった。

無論「美」の分析がホガース以前に試みられなかったわけではない。シャフツベリやハチスンの理論には、古典古代以来の美の生成に関わる原理についての考察が継承されているし、ハチスンは美の観念を喚起する性質として、多様ななかの統一"uniformity amidst variety"という形式を明示している。⁸ だが、この形式による美、すなわちハチスンが絶対美"absolute beauty"と呼ぶものは、基本的には多数の多様なものに特定の共通要素が存在する自然あるいは宇宙の美であり、人間の活動の所産の美を十分に説明しはしない。また、ハチスンが示すもうひとつの美、原型と写しとの間の一致に基づく相対美"relative beauty"は芸術作品に適用される概念だがその極く一部の説明にしかならない。ハチスンは自然の秩序と、そこに加えられる人間の意図による人

工の導入については一応の説明をすることができたが、自然の無秩序、人間の営みをも含んだ必然ではなく偶然としての自然を説明することはできなかった。

ホガースは美の生成に関わる原理として、適合性"fitness"、変化"variety"、均一性"uniformity"、単一性"simplicity"、複雑性"intricacy"そして量"quantity"を挙げている。これらの6原理が「互いに補正し、抑制しつつ相互に作用し合って美を生み出す⁹」というのである。ここにはシャフツベリやハチスンにも通じる古典的な原理も含まれている。だが、ホガースの場合、"uniformity"（そして"regularity"や"symmetry"）および("distinctness"とも言い換えられている)"simplicity"は、"fitness"と"variety"あればこそのものであり、積極的な作用力を持つ要因としての位置を6原理の中に与えられてはいない。"quantity"は、多くの場合、安定した「ピラミッド形」や「円錐形」、時には「卵形」あるいは「楕円形」といった特殊な形態と結び付けて考えられている"simplicity"と共に作用する、他の原理の強化要因としての性格が強く、多少否定的にも扱われている。

以上の諸原理と比較すると"variety"と"intricacy"には積極的な役割が認められている。また両原理は、"uniformity"や"simplicity"とは異なり、"fitness"に従属するものではない。但し、"variety"は"uniformity"よりも大きな喜びを与えると記されているものの、¹⁰ここでホガースが"variety"として是認しているのは「構成された変化」であり、構成されていない、デザイン無き変化は、混乱であり醜であるとされる。¹¹

『美の分析』の表題紙(図-1)の挿図上の印象的な文字のためか、ホガースの研究においては、"variety"という言葉が常に重要視されているが、『美の分析』の内容をそのままの形で理解するならば、歴史的により興味深いのは、むしろ"intricacy"の概念であろう。"intricacy"は多少の困難を伴い、それを克服する喜び、例えば、蛇行する道や河川を目で追う時の喜びなどを生む要因であり、"variety"よりも一層非古典的な美の原理である。

ホガースに特徴的なのは、これらの諸原理を「線」に

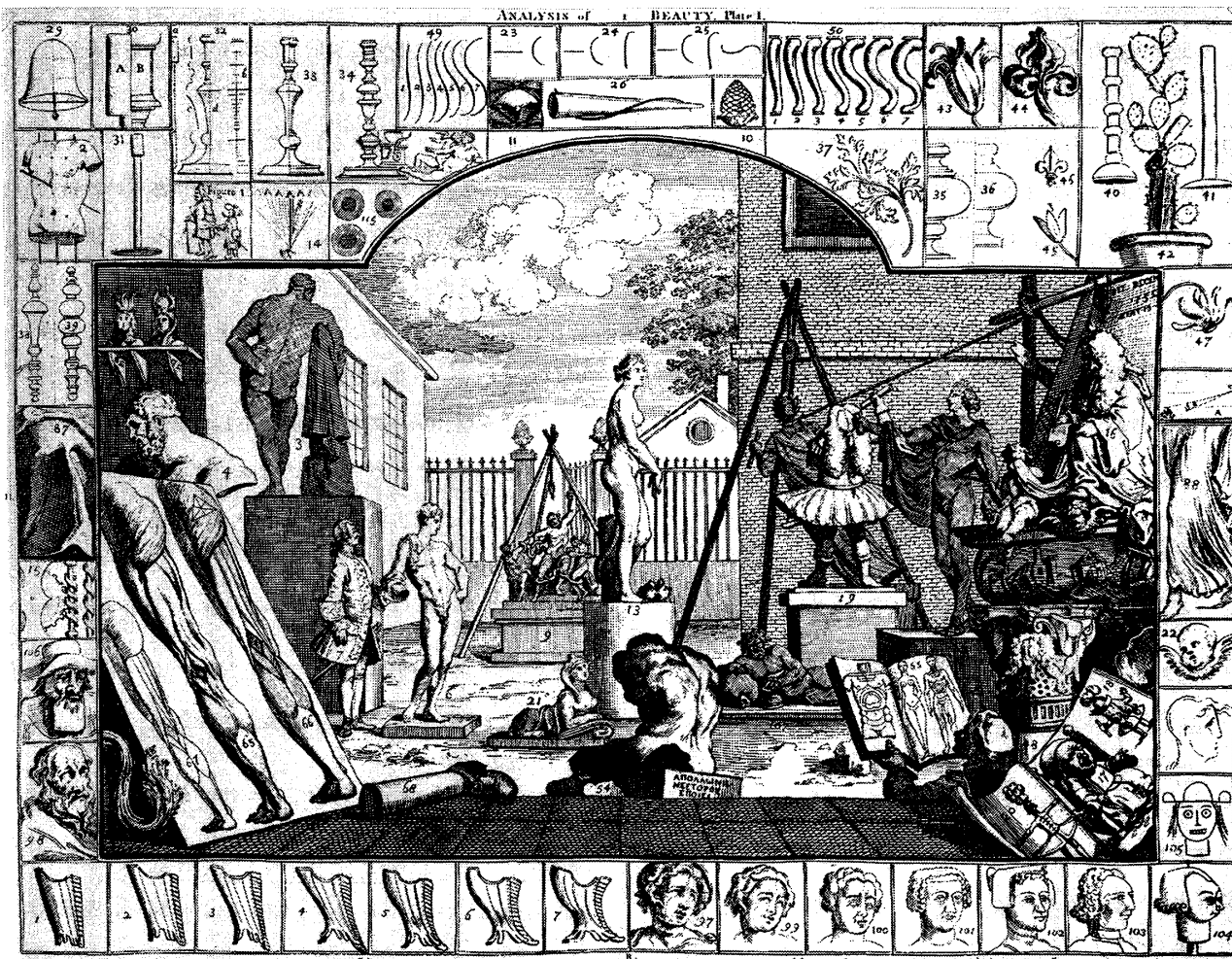


図-2 ホガース『美の分析』 Plate I

更に還元して把握する思考形態であり、形態における“intricacy”を一種の気まぐれな偶然へと視線を導く形を構成している線に固有のものだと考える。¹²線状のものとして捕えられた“intricacy”は更に運動へと結び付けられる。但し、この“intricacy”も、気ままな偶然性も、美を生成するためには、“variety”の場合と同様に「構成された」もの、即ち、一定の限度内にあるべきものと考えられている。¹³

以上のようにして、よく知られたホガースの波状曲線“the line of beauty(waving line)”と蛇状曲線“the line of grace(serpentine line)”が導き出される。波状曲線は単なる曲線よりも変化に富み、立体的にくねった蛇状曲線は更に変化に富んでいる。人はそのなめらかな変化を目でたどることに喜びを感じるというのである。これらの曲線は、美の諸原理から導き出されたものであり、具体的な次元でのホガースの美の原理と言えるであろう。

デザイン論

以上のように、ホガースの“variety”と“intricacy”は無制限のものではない。だが、広義の“variety”を必須のものとして含めつつ、分析的に少数の美の原理を定めるのは困難な仕事である。そこには少なくとも“uniformity”、“regularity”などの固定的な原理は重要な位置を占めることはできない。ホガースの『美の分析』において一番重要な原理として論じられたのは、適合性（あるいは合目的性）“fitness”という、特殊な形や大きさに理由なく固定されない、「関係性」の概念であった。ホガースは次のように述べる。

芸術“art”によって、あるいは自然“nature”によって、そのためにすべての個々のものが形成されるところの（全体の）デザインへの各部分の適合性“fitness”は、先ず第一に考慮されるべきものである。何故ならば、それこそは全体の美にとって最大

の重要性を有するものなのだから。¹⁴

ここでは制作活動が、構想論における自然の形成のアナロジーとして語られているのではない。少なくとも両者は支配関係にあるのではなく、芸術家あるいは技術者による設計、製作（または制作）は、その主体性を獲得している。デザインされたものの美は絶対的な比例関係にあるのではなく、かといって相対的な比例関係の習慣による成立を待つ必要も無く、適合の関係によって、それを作り、使い、見る当人が主体的に判断するのである。

諸物の大きさと比例関係は、合目的性“fitness”と適合性“propriety”によって支配される。これこそが、椅子、テーブル、そしてすべての道具および家具の類の寸法と比を確立したのである。これこそが大いなる荷重を支える柱やアーチなどの規模を定め、建築におけるすべてのオーダーを、そして窓や戸口などの寸法を規定してきたのである。¹⁵

比例の美というのは、その比が何らかの用途“use”あるいは目的“end”に関わる時にのみ認めうるものだという見解を示し、比の適合性“fitness of proportion”という言葉を用いたのはバークリーであった。¹⁶その“fitness”を美の第一の原理として掲げ、ほぼ“proportion”の媒介なしにとってもよいほどに、それを“beauty”に接近させ、デザインの重要原理として定着させる直接の基礎を築いたのはホガスであった。『美の分析』は続ける。

ある建物が途方もなく巨大なものであっても、階段の踏み段や窓辺の腰掛けは、引き続き、それらの通常の高さのものでなければならない。さもなければそれらは適合性を伴ったそれらの美を失うであろうから。そして、造船においては、各部の寸法は航海への適合性によって制限され、規定される。船が見事に航行する時、決まって船員たちはそれを美と呼ぶ。（適合性と美の）ふたつの観念はそれほどの結合関係にあるのだ！¹⁷

『美の分析』には、人体の各部の大きさと役割などは、むしろ以上のような日常生活の諸物における適合性と美との関係のアナロジーとして記述されているように読める箇所さえある。また、ホガスにとっては、部分の

適合性は諸物の性格を差別的に形成するものでもある。ホガスの『美の分析』は、「美の曲線」の主張によってイギリスにロココ趣味を定着させたことによってではなく（図-2）、むしろ適合の美と、性格あるいは特性の美“characteristic beauty”の主張によって、近代デザイン論の基礎の重要な一部を形成したことによって注目される。その影響は、英米文化圏に限って見ても極めて大きく、かつ多様な形で現われており、アリスン、ソーン、ラウドン、グウィルト、そしてグリノウへと及んでいる。¹⁸ すなわち、この意味で『美の分析』は古典主義あるいは非古典的諸様式といった「趣味」を選んではない。

註

1. Joseph Burke, William Hogarth, The Analysis of Beauty, Oxford, 1955, xix.
2. 拙論「ハチスンのデザイン論」、日本建築学会近畿支部研究報告集、第27号、1987、921-924.
3. William Hogarth, The Analysis of Beauty, London, 1753, 3-4.
4. Ibid., 4.
5. Ibid., 21.
6. 例えば、George Berkeley, Alciphron, London, 1732, 120.
7. Hogarth, Analysis, 7.
8. Francis Hutcheson, An Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, London, 1725, 15.
9. Hogarth, Analysis, 31.
10. Ibid., 40.
11. Ibid., 35.
12. Ibid., 42.
13. Ibid., 45. ホガスは“intricacy”を“variety”の一種だとも考えており、概念規定の曖昧さが、ここにも見られる。
14. Ibid., 32.
15. Ibid., 32.
16. Berkeley, Alciphron, 128.
17. Hogarth, Analysis, 33. ()内筆者補足。
18. 拙論「アリスンの『趣味論』—デザインの位置をめぐって」美学、第148号、1987、13-24.

(京都工芸繊維大学助手・学術博士)